

サラリーマンの生きがいの構造, 年齢差および性差の検討

西村 純一

(平成 16 年 9 月 30 日受理)

Investigation of the Structure, Age Difference and Sex Difference Concerning the Purpose in Life among Japanese Salaried Workers

NISHIMURA, Junichi

(Received on September 30, 2004)

キーワード: 生きがいの構造, 日本のサラリーマン, 年齢差, 性差

Key words: the purpose in life, Japanese salaried workers, age difference, and sex difference

古谷野 (2003) によれば, 欧米では, モラール (morale) や生活満足度 (life satisfaction) という操作的概念を用いて幸福な老いの程度を測り, 幸福な老いの規定要因を探る研究が進められてきた. Neugarten, B. L., Havighurst, R.J., & Tobin, S.S. (1961) の生活満足度尺度 A (Life Satisfaction Index A: LISA) や Lawton, M. P. (1975) の PGC モラール・スケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale), 及びその改訂版が代表的なものである. また, Larson, R. (1978) によって, これらの尺度に共通する感情の連続体の総称として, Subjective well-being という語が提案され, 広く普及している. そして, 主観的幸福感を規定する要因の検討が種々行われ, 健康度, 身体的障害の程度, 社会経済的地位, 年齢, 人種, 性, 職業の有無, 配偶者の有無, 交通の便, 住宅, 社会的活動などとの関連性が示唆されている (Larson, R., 1978).

日本においても, 主観的幸福感と翻訳され, 一般的な幸福感とは区別されている. また, わが国においても, こうした欧米の主観的幸福感に関する尺度の日本版やその改訂版が作成され, わが国固有の生きがい概念の代替として検討されることもあった (杉山・他, 1981; 古谷野, 1981).

しかし, 主観的幸福感とは, わが国固有の概念といわれる「生きがい」と比べて, あまりに定量的に単純化され

ていて, 「生きがい」に含まれる日本人特有の微妙な感情の質的違いを十分にとらえているとは言い難い. また, 幸福な老いの結果を測定しているに過ぎず, そのプロセスを無視しているということで, 欧米でも最近, 批判されるようになってきている (東, 1999). それゆえ, 日本人の幸福な老いの問題を検討するためには, 主観的幸福感ではなく, わが国固有の「生きがい」の側面から日本人特有の感情の質的違いをとらえる連続体を尺度として抽出し, そうした生きがい尺度を利用してその規定要因を探るアプローチが必要であると考えられる.

しかし, わが国における「生きがい」の研究は, 神谷 (1966) の「生きがいについて」, 小林 (1989) の「生きがいとは何か」など生きがいの概念についてはいろいろと論じられているが, 現実の生きがいの感じ方の質的違いをとらえる連続体の測定に関する実証的な検討はあまり進んでいない. 生きがいに含まれる日本人の微妙なニュアンスの尺度化が困難であったため, 生きがいという面からの実証的研究は敬遠され, 欧米の主観的幸福感スケールを用いた研究に流れるきらいがあったように思われる. また, よしんば行われたとしても, 生きがいの有無を問うのみのきわめてラフな調査でその規定要因の詳細な検討に耐えないものがほとんどであった.

生きがいは, もともと人々の日常の生活のなかから生まれてきた言葉であり, 抽象的な生きがい論議よりも, 各自の日常の生活感覚に沿ってとらえることが, 生きがいの本質に迫る上で重要と考えられる. そうした観点か

ら、財団法人シニアプラン開発機構のサラリーマンの生きがい調査(財団法人シニアプラン開発機構, 1992; 1993a; 1993b; 1997; 2002; 2003)は注目に値する。この調査では、生きがいの概念を特定の解釈に限定せず、また、欧米の主観的幸福感スケールにとらわれずに、日本のふつうのサラリーマンが感じているとみられる比較的一般的な生きがいの感じのカテゴリーを9種類用意し、個々人に自分の感じ方にもっとも近い生きがいのカテゴリーを2つ以内で選択させている。これらのデータは基本的にカテゴリカルデータであるため、生きがいの感じ方の連続体の抽出に当たって因子分析のような定量的分析はなじまない。そこで、本研究では、このデータにカテゴリカルデータの分析法のひとつである等質性分析(石村, 2001; Meulman, J. & Heiser, W. 2001)を適用し、生きがいの感じ方の連続体(以下、生きがい尺度と呼ぶ)の抽出を試みることを目的とする。さらに、得られた生きがい尺度を用いて、サラリーマンの生きがいと年齢や性別との関係を検討する。定年による仕事の喪失によってサラリーマンの生きがいの感じ方がどのように変わるのか。また、女性の社会進出が進み、定年退職する女性も増えてきているが、男性と女性で生きがいに違いはあるのか、検討することが本研究のもうひとつの目的である。

方法

調査方法と分析対象 全国の厚生年金基金の加入者・受給者。対象者の年齢を35～44歳, 45～54歳, 55～64歳, 65～74歳の4層に分け、各層1,100人強、計4,505人を対象とした。性別構成は厚生年金基金加入者・受給者の性別構成に準じて、各年齢層とも男性3:女性1の比率とした。なお、男性の59.9%, 女性の63.1%が現役で、男性の40.1%, 女性の36.0%が定年を経験していた。また、年齢区分別の現役率は35～44歳で98.8%, 45～54歳で97.3%, 55～64歳で51.6%, 65～74歳で4.4%であった。企業の業態や設立形態など、基金の構成を反映させて175基金を選定した。平成13年10月から12月にかけて郵送調査を実施した。有効回収数は3,189件、有効回収率は70.8%。

分析内容 本研究では、財団法人シニアプラン開発機構が平成13年に実施した「サラリーマンの生きがい調査」のうち、生きがいに関する次の質問およびフェースシートの年齢と性別のデータを分析する。

【生きがいに関する質問の内容】

問 よく「生きがい」と言われますが、次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください。

1. 生活の活力やはりあい
2. 生活のリズムやメリハリ
3. 心の安らぎや気晴らし
4. 生きる喜びや満足感
5. 人生観や価値観の形成
6. 生きる目標や目的
7. 自分自身の向上
8. 自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる
こと
9. 他人や社会の役に立っていると感じる
こと
10. その他()

結果

日本のサラリーマンの生きがいの感じ方を反映する尺度を抽出すべく、①生活の活力やはりあい、②生活のリズムやメリハリ、③心の安らぎや気晴らし、④生きる喜びや満足感、⑤人生観や価値観の形成、⑥生きる目標や目的、⑦自分自身の向上、⑧自己実現や達成感、⑨自己効力感や社会的評価、以上9種類の生きがいのカテゴリーに関する選択・非選択のカテゴリカルデータを等質性分析によって分析した。「その他」というカテゴリーは雑多な意味が含まれてくるので分析から除外した。

(1) 生きがいのカテゴリーの空間的配置

等質性分析の数量化の結果にもとづいて、選択された生きがいのカテゴリーの空間的配置を示したのが図1である。なお、2つ以内で回答させる限定回答法であるためカテゴリーの非選択は選択に比べて必然的に多くなり、そのため非選択は数値的に小さく原点付近に位置するため、煩雑になるので表示を省略した。

第1因子は、「心の安らぎや気晴らし」「生活のリズムやメリハリ」など生活の安定感を正の方向、「生きる喜びや満足感」「自己実現や達成感」など生活の充実感を負の方向に判別している。したがって、この因子を生活充実感对生活安定感の因子と呼ぶことにする。

第2因子についてみると、「人生観・価値観の形成」「自

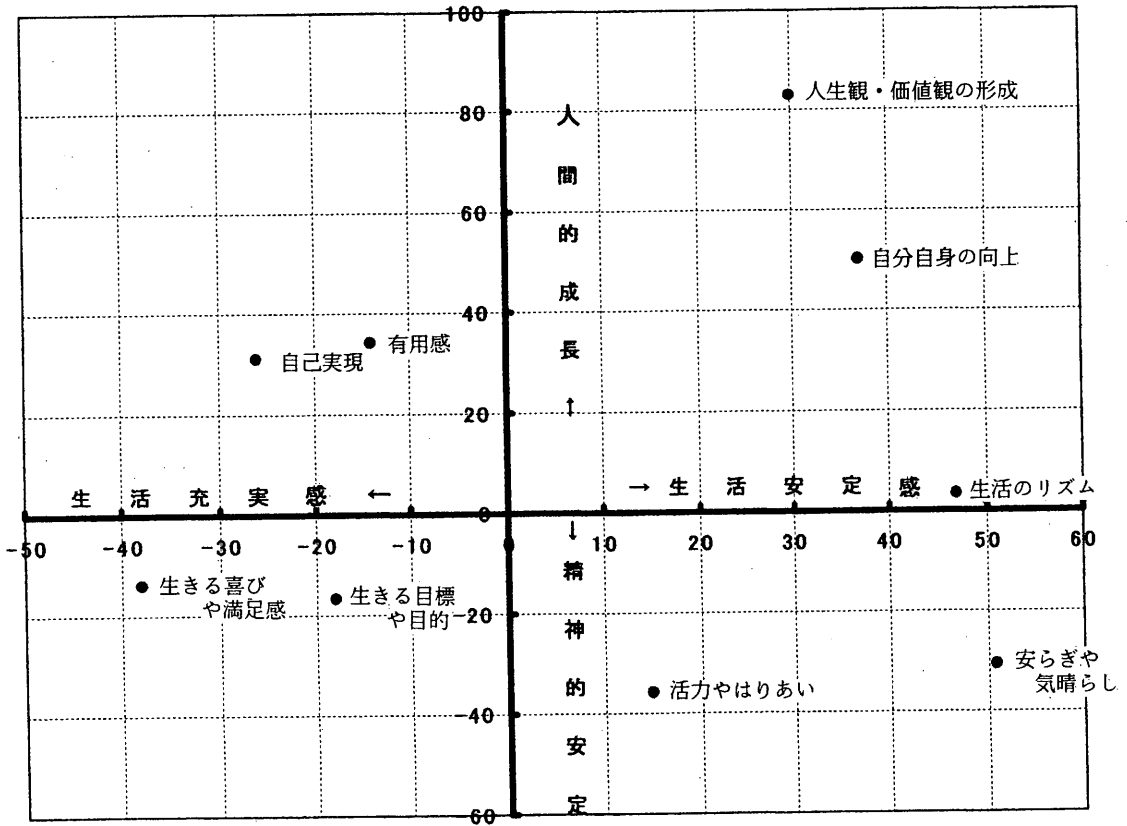


図1 生きがいのカテゴリーの空間的布置

分自身の向上」を正の方向、「生活の活力やほりあい」「心の安らぎや気晴らし」を負の方向に判別している。そこで、この因子を精神的安定対人間的成長の因子と呼ぶことにする。

(2) 生きがいの感じ方の年齢差と性差

生活充実感对生活安定感の因子のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図2である。男女とも年齢が上がるとともに生活充実感から生活安定感へ移行する傾向がみられた。とくに、男性の60代後半から70代にかけてその傾向が顕著であったが、年齢差は統計的に有意であった ($F(7, 3090) = 4.23, p < 0.001$)。性差や交互作用は認められなかった。この結果は、若い頃は生活充実感を求めているが、高齢になると生活充実感よりも生活安定感を希求するようになることを示している。

精神的安定対人間的成長の因子のサンプルスコアの年齢曲線を男女別に示したものが、図3である。この結果は、若い頃は精神的安定を求めているが、年齢が上がるとともに男女とも精神的安定から人間的成長を求めるよ

うになる傾向があることを示している ($F(7, 3090) = 2.83, p < 0.01$)。性差や年齢差と性差の交互作用は認められなかった。

考 察

等質性分析の結果、日本のサラリーマンの生きがいの背景には、2つの異なる生きがい感の因子が示された。すなわち、ひとつは、「心の安らぎや気晴らし」「生活のリズムやメリハリ」など生活の安定感の方向で生きがいを感じているか、それとも「生きる喜びや満足感」「自己実現や達成感」など生活の充実感の方向で生きがいを感じているか、アンビバレントな意識を判別する因子である。もうひとつは、「人生観・価値観の形成」「自分自身の向上」など人間的成長の方向で生きがいを感じているか、それとも「生活の活力やほりあい」「心の安らぎや気晴らし」など精神的安定の方向で生きがいを感じているか、アンビバレントな意識を判別する因子である。

そして、これらの因子では生きがいがかたがたしており、

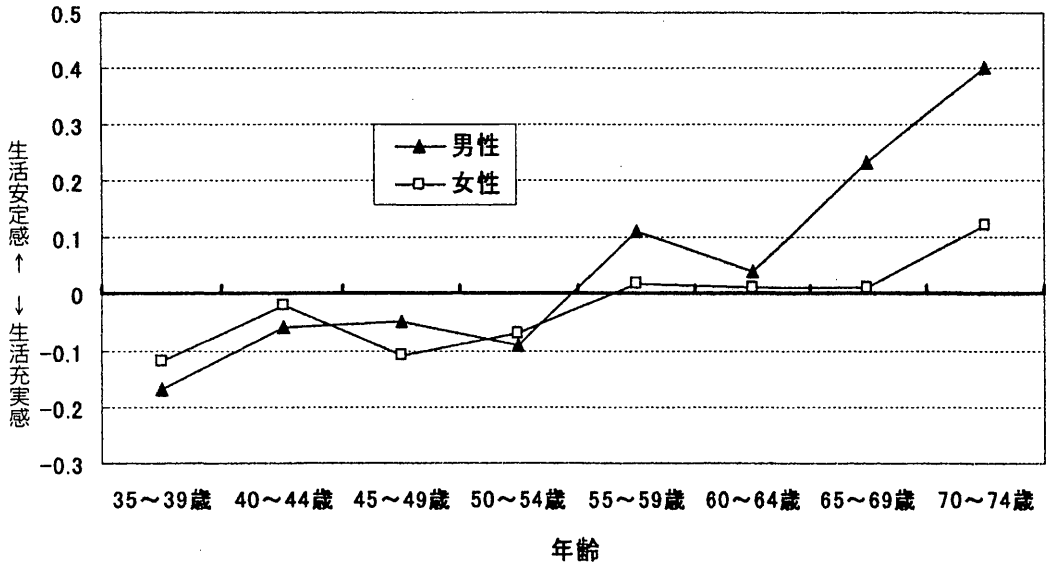


図2 生活充実感对生活安定感の因子得点の年齢差・性差

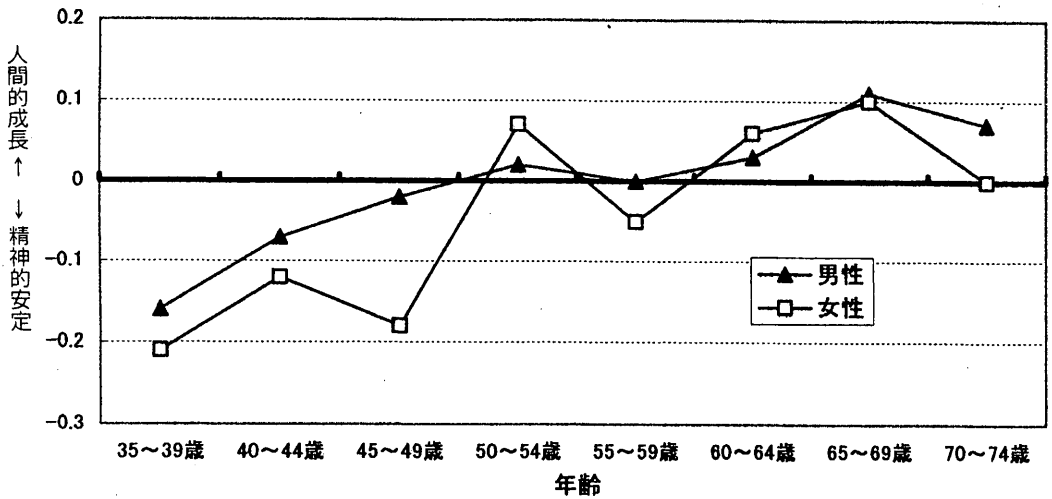


図3 精神的安定対人間的成長の因子得点の年齢差・性差

生活充実感の方向で生きがいを感じている場合は、生活安定感の方向で生きがいを感じることは少ない。逆に、生活安定感の方向で生きがいを感じている場合は、生活充実感の方向で生きがいを感じることは少ない。同様にして、精神的安定の方向で生きがいを感じる場合は人間的成長の方向で生きがいを感じることは少ない。逆に、人間的成長の方向で生きがいを感じる場合は精神的安定の方向で生きがいを感じることは少ない。もとより、こ

れらの感じ方は両極端を言っているわけで、実際には、これらの中間的な感じ方をしている人が多いと推測される。

このように欧米の主観的幸福感スケールなどと異なり、生きがいのカテゴリーが拮抗して表れたことについては、限定回答法によるデータの収集、カテゴリカルデータの分析法である等質性分析を適用など方法論的相違が大きいの直接的に比較することはできない。しかし、こ

した結果の違いはたんに調査方法や分析方法の違いに起因しているだけではなく、やはり日本の生きがいの場合には主観的幸福感のような単純な量的水準の違いでは示しえない、微妙な感情の質の違いを反映していると考えられる。また、そうした生きがいの質の違いを浮き彫りにするという意味では、本調査のような限定回答法や等質性分析がそれなりに有効であると考えられよう。

また、等質性分析から得られた2つの尺度と年齢、性別との関連を検討した結果、男女とも年齢が上がるとともに生活充実感から生活安定感へ移行する傾向がみられた。これは、定年移行にともない、生きがいの志向が、生活充実感から生活安定感へ質的に変化するためと推察される。若い頃には、「生きる喜びや満足感」「自己実現や達成感」など生活充実感を志向する傾向が強いが、定年到達後は、「心の安らぎや気晴らし」「生活のリズムやメリハリ」など生活の安定感がよくなってくるとみられる。それとともに、若い頃は、「生活の活力やはいりあい」「心の安らぎや気晴らし」など精神的安定を志向する傾向が強いが、定年到達後は、「人生観・価値観の形成」「自分自身の向上」など人間的成長の方向で生きがいを志向する傾向が強まると予想される。

また、若いサラリーマンが精神的安定を志向し、定年到達後は生活安定を志向しているというのはどのように考えることができるのか。この点に関しては、推測の域を出ないが、おそらくは日本の若いサラリーマンが経済的に安定しない状況の中で精神的安定感を志向しているのに対して、定年到達後は、仕事など外での生活を縮小し、生活を安定させる一方で、内面的な生活を充実させ、人間的成長を希求するようになることを示唆しているように思われる。

男性と女性とでは現役のときも定年到達後もライフスタイルがかなり異なり、生きがいの感じ方に性差が見られるのではないかと予想されたが、意外と性差は認められなかった。しかし、男性が60歳以降、生活安定志向が急速に強まるのに対して、女性はなお生活充実をはかる傾向を維持しつつあることがうかがわれ、今後さらに分析を試みる必要がある。また、本研究は横断的デザインによっておこなわれているため、本研究で得られた年齢差が年齢的变化によるものであるのか、コホート差によるものであるのか、さらなる検討が求められよう。

謝 辞

本論文は、シニアプラン(2003)の調査報告書の一部に加筆修正したものである。「サラリーマンの生きがい調査」に参加させていただくとともに、今回、データの追加分析の機会を与えていただいた財団法人シニアプラン開発機構に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 東清和 1999 『エイジングと生きがい』 東清和(編)「エイジングの心理学」早稲田大学出版部 Pp.131-168.
- 石村貞夫 2001 SPSSによるカテゴリカルデータ分析の手順 東京図書 Pp.140-155.
- 古谷野亘 1981 生きがいの測定—改訂PGC モラル・スケールの分世紀—老年社会科学, 3: 83-95
- 古谷野亘 2003 『サクセスフル・エイジング』 古谷野亘・安藤孝敏(編著)「新社会老年学」p.141-163.
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33:109-125.
- Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A reversion. *Journal of Gerontology*, 30:85-89.
- Meulman, J. & Heiser, W. 2001 SPSS Categories 11.0 SPSS Pp.183-196.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. 1961 The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16:134-143.
- シニアプラン開発機構 1992 第1回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして
- シニアプラン開発機構 1993a 第1回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：第2次調査
- シニアプラン開発機構 1993b 生きがいに関する研究会 最終報告書—サラリーマンシニアの生きがい創造に向けて
- シニアプラン開発機構 1997 第2回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして
- シニアプラン開発機構 2002 第3回 サラリーマンの

生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして
シニアプラン開発機構 2003「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」のフォローアップ調査

杉山善朗・竹川忠男・中村浩・佐藤豪・浦沢喜一・佐藤保則・斉藤桂紀・尾谷正孝 1981 老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版PGMの作成(1)―尺度の信頼性および因子的妥当性の検討―老年社会科学, 3:57-69

Abstract

In this survey, we investigated the structure, age difference and sex difference concerning the purpose in life among Japanese salaried workers. For this purpose, we sent survey regarding of purpose in life to participants of employee's pension fund between 35 to 74 years of age, and effective answer of which was 3,189 (70.8%). The ratio between man and woman was approximately 3 to 1.

As a result of using homogeneity analysis to analyze data of purpose in life obtained by limited answer method by which less than 2 were selected in 9 categories, 2 dimensions were extracted. The 1st dimension seems to distinguish the purpose in life by making life more satisfactory and purpose in life by making life more stable. The 2nd dimension seems to distinguish purpose in life by mental stability and purpose in life by improving him or herself as human beings.

As a result of discussing difference by age and sex based on sample score of both dimensions, a trend was shown that as both men and women grow older, they change from the spurpose in life by making life more satisfactory to making life more stable as well as from living by mental stability to improving him or herself as human beings respectively. There, however, was no difference between man and woman.